

# 中世後期における地域権力の対外交渉と寺院

—— 交渉実務を中心に ——

貝 英 幸

## はじめに

大永三年（一五二三）別々に寧波に入港した細川・大内両船は、現地での事務取扱いの順番をめぐり大乱闘を引き起こす。いわゆる「寧波の乱」である。以後対明交渉は大内氏が独占することとなるのであるが、それら大内氏によって派遣された遣明船については、小葉田淳氏による『中世日支貿易史の研究』、牧田諦亮氏による『策彦入明記の研究』がある。<sup>1)</sup>小葉田氏の研究はいうまでもなく、大内氏の遣明使節のみならず日明交渉全般を詳細に検討したものである。一方牧田氏の研究は、策彦周良が参加した遣明使節について「策彦入明記」をもとに詳細に検討したものである。これら先学の研究により、経緯や具体的

状況など、大内氏の対明使節についてその大部分が明らかとなっているが、牧田氏の研究は「策彦入明記」という一史料を中心に扱ったものであり、大内氏の対明交渉を主題にしたものではない。特に筆者が関心をもつ地域権力の対外交渉、それを支える実務組織という問題については必ずしも十分に言及されているとはいえない。

ところで、これまでの対外交渉史研究は、史料的な制約も影響しているとはいえ、次のような特徴をもっている。一つは交渉当事者の問題としてである。日明関係では幕府を、日朝関係では宗氏による交渉を中心に扱う傾向が強く、幕府と明、宗氏と朝鮮との関係についての研究を中心としている。<sup>2)</sup>今一つは交渉の具体的様相の問題として、実際に渡海し明や朝鮮と直接交渉を行った人々や、交渉により往来した文物など、交渉の前面

に現れるものを明らかにすることに力が注がれたことである。<sup>③</sup>

こうした傾向は、当該期の対外交渉史研究を限定的な見方に追いやり、上田純一氏によって「外交と漢詩文に象徴される、どちらかと言えば五山国家的交流の分野に強い照明があてられた結果、その周辺や外部に存在した民間的色彩の強い、地域的交流の分野が舞台の隅へと押しやられ」たと称されたような状況を生み出した。<sup>④</sup>

一方、村井章介氏によって津軽安東氏の上表文偽造による大蔵経招来問題が明らかにされて以降<sup>⑤</sup>、当該期の偽使派遣問題について活発な議論が展開されている。それらについてここで逐一コメントはしないが、特に本稿との関わりでいえば、最近の橋本雄氏・米谷均氏の指摘のごとく<sup>⑥</sup>、当該期の巨酋使のほとんどが偽使であるならば、偽使の問題は一地域権力の対外交渉としての問題を超え、地域社会全体にまで及ぶ極めて重要な問題として考える必要があろう。

こうしたことから考えても、もはや当該期の対外交渉史研究は、幕府外交のみをもつて是とする段階ではなくなってきたおり、地域権力の対外交渉をその制度や組織を含めたかたちで再検討する必要があることは自明のことといえよう。

ではこうした地域権力の対外交渉について考えてみるとして、実際の使節派遣はどのようにして準備されたのであろうか。幕

府の対外交渉については、田中健夫氏・西尾賢隆氏らの研究があるが、特に最近田中氏によって『前近代の国際関係と外交文書』<sup>⑦</sup>がまとめられたことにより、使節を支える外交組織に対する検討は本格化した<sup>⑧</sup>が、それら外交組織と政治権力との関わりについて、特に地域権力の対外交渉と外交組織については依然手つかずの状況である。地域権力の対外交渉についても、外交文書の起草など、幕府外交において蔭涼軒が果たしたような役割やその組織について、彼ら地域権力の行った交渉の実務そのものを考えてみる必要があるのではなからうか。

そこで本稿では、大内氏の対外交渉について、彼らの交渉実務の検討を通じて地域権力の対外交渉を考えてみたい。大内氏は、周知のように日朝交渉において、幕府・宗氏以外の政治権力としては早期よりかつ頻繁に交渉を行い、また日明交渉においては最終的にその権利を独占した。こうしたことから考えれば、大内氏の対外交渉の実務レベルも相当なものであったと推測される。しかしながらそうした実務は、幕府外交において蔭涼軒が実務を担当していたように、実務集団の存在によって可能となるものである。大内氏の場合も幕府外交同様、禅宗僧侶によって実務が行われたことは違いなからうが、実務集団として考えた場合、その組織や大内氏との関わりなど未だ検討すべき点は多い。

## 一、交渉の事前実務

大内氏の交渉実務についての具体的な検討に入る前に、当該期の幕府の交渉実務の実態を、先学の研究に導かれながらみておくこととする。<sup>(9)</sup>特にここでは『蔭涼軒日録』により、事前実務の一連の流れのなかで蔭涼軒がどのような役割を果たしているのか、事務手続きに着目しつつ検討したい。通交の規模や人的組織など、幕府の対外交渉と地域権力のそれとを同列に比較することはできないが、交渉実務そのものはそれほど異なるものでもなからうから、幕府の交渉実務を概観することは地域権力の事例を検討する際の参考にならう。

さて、幕府の交渉実務は、交渉の相手が明なのか朝鮮なのか、また通交の主体が幕府自身なのか、それとも幕府となんらかの関わりをもつ個人なのか寺社などであるのかなど、通交毎の事情により実務にも多少の違いは生じる。通交の規模が最も大きく実務も複雑な対明使節の場合でいえば、実務は大まかには使節（団）の人選・組織、携行品の準備、警固の要請からなる。まず実務の最初に行われる使節団の人選・組織についてみておこう。

実際に交渉国へ通交し現地では交渉に当る人々を選ぶことは、事前実務の中でも極めて重要な意味を持つ。使節は正使・副使

・居座・土官からなるが、なかでも遣明正使はいわば全權大使としての性格を持ち、日本からの船載品の買上げ価格の交渉に当るといふ役割も担っていた。当然語学や折衝などの能力が重要視されたが、それ以外にも、長期に渡る海外生活に耐えうるか否かといった健康面も考慮されねばならない。人選する側もこうした点を考慮し使節団の構成を考えることとなる。

文明十九年（一四八七）使節派遣が計画された際を例にみると、計画に先立ち「自飯尾大和入道宅召僧、遣梅首座、和州云、遣唐船之事被仰出、正使并居座可然仁体擇之、早々書立可有進上之由被仰出也<sup>(10)</sup>」という形で蔭涼軒に対し派遣計画が明らかにされると共に、遣明正使など使節団の人選が指示されている。

ここで人選を指示している飯尾大和入道は、『蔭涼軒日録』寛正五年（一四六四）五月二十八日条において「唐船奉行飯尾大和守」と見える飯尾元連で、幕府と蔭涼軒の間で行われる対外交渉に関する連絡は、唐船奉行を通すのが原則であったようである。<sup>(11)</sup>

次に、幕府からの指示をうけた蔭涼軒は候補者の人選に入る。候補者の人選は、候補予定者との懇談、唐船奉行飯尾元連や他の幕府関係者との調整を経つつ、候補者をリストアップする形で行われる。<sup>(12)</sup>候補者がリストアップされると、候補者リストは清書の上將軍へ披露され、<sup>(13)</sup>承諾を得た後、候補者それぞれに對

し正式な就任要請が行われる。<sup>(14)</sup>ここでは触れないが、副使や居座・土官など他の使節についても原則的には同様である。しかし実際は、候補者に対しては事前に就任の打診が行われており、多くの場合、要請が行われた時点で就任は半ば決定している状況にあった。

しかしその一方で、明との交渉はそれ自体が政治的な問題であると同時に、貿易が巨大な利権を生み出す性格のものであるから、時には政治的な動静により、あるいは利権の獲得を目標とする政治権力の介入により、人選が紆余曲折を経るのは常であった。特に居座・土官など、使節のなかでは下級人員に当る者の人選をめぐるのは、細川氏や大内氏などの守護や、伊勢氏といった幕府関係者が介入しようとしている。先にみた文明十九年の場合を例にとれば、候補者のうち居座候補の一人となった興文首座が就任を固辞し、「擇別人被差替者可然」という事態となっていた。<sup>(15)</sup>これは、興文首座が大内氏の在京雑掌僧であることから考えれば、<sup>(16)</sup>興文の居座就任を大内氏が政治的なカードとして利用したものといえる。また別の例では、伊勢貞宗が一旦は決定した使節団へ、人員の追加を要請しているのが確認できる。<sup>(17)</sup>

こうしたことに加えて今一つ重要なのは、遣明船の派遣が計画から実際の渡航までに相当の期間を必要としたことである。

例えば応仁度の遣明使節の場合、実際に渡明するのは応仁元年（一四六七）であるが、計画は既に長禄四年（一四六〇）の段階からなされている。こうした長期にわたる計画は、一度組織した使節団をどう維持していくかという問題にもつながるし、この間に新たな問題が惹起する可能性も孕んでいる。

応仁度の遣明正使天与清啓は、長禄四年正使就任を領掌し信濃より上洛していたが、<sup>(18)</sup>寛正二年（一四六一）「小笠原遠江守逝去」により一旦信濃に下向することとなった。その際「来三月以前可有上洛」きことを約す一方で「就渡唐之事、被申御暇」<sup>(19)</sup>れている。結局清啓の正使辞退、再度の人選という大事には発展しなかったが、清啓の再度の上洛にはこの後二年半もの期間を要し、最終的に上洛したのは寛正五年四月であった。<sup>(20)</sup>この間、蔭涼軒では信州の清啓の許に書翰を送り、早期の上洛を促すなどしている。<sup>(21)</sup>

このように正使の人選一つをとっても、候補者のリストアップから幕府関係者の合意の取り付け、他の政治権力の介入など、それぞれの段階で多くの問題が起きている。人選は正使のみではなく、副使や居座・土官など使節団全てで行われるわけであるから、先に指摘した問題はそうした人選全てで起こりうる可能性があったといえる。

以上の手続きは対明交渉の際の実務であるが、諸国守護や寺

社などが幕府に対し朝鮮への通交の仲介を依頼する場合はどうであつたのであろうか。

(史料一)

南都宏(興)福寺金堂為修造、求朝鮮国勸進之正使、為話柄持造花一株而來謝也、造花者桜也、朝鮮国(疏)之事者、愚老以飯尾肥前守可命之由被仰出、是故來告之、<sup>(22)</sup>

(史料二)

越後国安国寺内在田庵、求一切經、仍白請高麗船疏事、可白付于可然仁体之台命有之、乃以茂叔論小補云、高麗疏以前春陽景徐見制之、桃源未制、可命桃源、雖然可被念弄入寺仏事、然者可為無心乎、不如小補翁制之、(中略)高麗疏之事、小補峻拒云、茂叔制之可也、愚曰、遣外国疏、後生者可制之事為聊爾也、和尚見制之、台慮亦相協云々、使者琳杏雲、<sup>(23)</sup>

(史料三)

土岐美濃守高麗勘合之事、望白之旨伺之、蓋求藏經奉納于濃州一宮之謂也、<sup>(24)</sup>

ここでは、寺社の場合として興福寺と越前国安国寺を、さらに幕府縁者の事例として土岐氏の例をあげた。事例では、史料一の興福寺のように寺院の修理費用の捻出のための勸進を行う者や、史料二の安国寺や、三の土岐氏のごとく大藏經を請来し

ようとしたものなど、それぞれに通交の目的・理由は異なるものの、いずれの例も幕府に通交の仲介を依頼したものである。

これらの例で興味深いのは、個々の通交が幕府管理のもとで行われているのではなく、むしろ通交を希望する側が幕府関係者に仲介を依頼していることである。むしろ朝鮮へは独自に通交する者もいたのであるから、当時の通交希望者全てが幕府に仲介を依頼したのでないことはいうまでもない。しかし土岐氏の例に見られるように、幕府の仲介に対して五千足もの礼銭が支払われている事実は注意を要する。興福寺や越後安国寺も、史料上は確認できないものの、恐らくは幕府に対して相当の礼物・礼銭を渡したものと思われる。

このように幕府の仲介に対し多額の礼銭を支払うということは、経済的な側面からみれば、一度の通交が支払った礼銭以上の利益をもたらすことに外ならないし、そうした利益獲得を目指して通交が計画されたのである。とはいえ、多額の仲介料を支払う理由は考えておかねばなるまい。

明への使節のごとく、半ば幕府の独占状態にある通交へ商客として参加するのであるならばまだしも、朝鮮への通交の場合、独自に通交することも全く不可能ではない。事実朝鮮へは、僅かの物品を携えただけで通交を試みる者も存在したのであるから、独自に通交することができるとしてみれば、幕府に支

払う札銭は不要な出費ということになる。にもかかわらず多額の仲介料を支払ってまで通交が計画されていることは、幕府の仲介に利点があったからである。しかし幕府による通交の仲介事例を見ても、朝鮮への通交の仲介は、明への使節派遣の場合とは異なり極めて簡単であるといわざるをえない。幕府が行う通交の仲介は、実際には興福寺の場合の「朝鮮国（疏）之事者、愚老以飯尾肥前守可命之由被仰出」であり、越後安国寺に対する「仍白請高麗船疏事、可白付于可然仁体之台命有之」であった。幕府は通交希望者により仲介が依頼され、それが承諾されると上表文の執筆を（執筆者の人選を）蔭涼軒に命じるだけなのである。つまり幕府による通交の仲介とは上表文の執筆代行に他ならず、具体的には、通交者に代わって上表文を執筆し、その上表文に「被下御印」ることであった。<sup>(25)</sup> 通交希望者は希望の物品を手中に収めるためのより確実な方法として、朝鮮政府との交渉の第一歩となる上表文の執筆を幕府に依頼したのである。

では次に、こうした上表文について実務的な動きを中心に検討しよう。

## 二、上表文の執筆

上表文は、明国皇帝や朝鮮国王に対して出される外交文書で、単に「表文」とも呼ばれるが、『蔭涼軒日録』などには、通交先毎に「渡唐疏」あるいは「高麗疏」、「朝鮮疏」などと記されることが多い。その内容は主として時宜に応じた通交者の進言理由が記され、貢納品の明細については別幅に記されることとなっていた。上表文は、日明関係において重要であったことはいうまでもないが、日朝関係においても重要な役割を果たした。

ただ日朝関係においてはほとんどの通交者が宗氏の管轄下にあつて、特に応永二十六年（一四一九）の「応永の外寇（己亥東征）」以後は、宗氏による渡航許可証である文引を用いて渡航確認がなされた。<sup>(26)</sup> そのため上表文は全ての通交者が携行したものではなく、明との交渉に比べればその必要性はそれほど重要視されない。しかし宗氏の管轄外の者、幕府および斯波氏、大内氏、菊池氏等には文引無しでの通交が認められており、彼らの派遣する使節や彼らの仲介を受ける者にとって、上表文は日明関係の場合と同様、重要な意味を持つものであった。上表文の作製過程を、幕府の場合を例に、順を追ってみていこう。

上表文作製の最初は、先に見た使節の人選と同じく、幕府より「渡唐疏」、「高麗疏」を製すべき旨の命令がある。通常は越後安国寺の例のごとく「可白付于可然仁体」という將軍の命が蔭涼軒に伝えられるのみであったようである。次にこの命に従

い、蔭涼軒を中心に起草者の人選が行われる。例えば、先にみた文正元年（一四六六）の興福寺の場合は次のようである。

南都興福寺金堂、薬師寺勧進奉加被求于朝鮮国之（疏）、  
其文者綿谷西堂製之、奉懸于御目、御印之事伺之、（中略）朝鮮国被遣之（疏）御印者、徳有鄰也、蓋旧例也、<sup>(27)</sup>

ここでは綿谷周應が起草者に選ばれているが、上表文執筆の要請は場合によっては候補者に固辞され、説得が行われる場合もあった。<sup>(28)</sup> これら起草者は、多くの場合経験者によって執筆されたようであるが、特に明へ持参する上表文については起草者も厳選されている。

起草者が決定すると、蔭涼軒より幕府に報告が行われ、起草の日程が定められた。<sup>(29)</sup> そして実際の執筆は『臥雲日件録抜尤』寛正元年九月十八日条に「十八日、一天英来、出示高麗書艸、又韻字類千字文者持来、盖上下平而止耳、」とあるように、執筆者が草案を作製した上で経験者などに意見を聞くかたちで執筆されていた。

上表文の草案ができあがると、それを将軍が閲覧する。<sup>(30)</sup> 内容について異議が唱えられることは少なく、儀礼的な性格が強い。しかし延徳四年、将軍義植は六角氏討伐のため近江に出陣中であったが、この時は将軍義植の許で内容の披露が行われており、儀礼的なものとはいえ作製上欠かざるべき重要な儀礼の一

つであつたといえる。

草案の内容について将軍の承諾が得られると、上表文の清書が行われる。これも吉日が選ばれ、また清書を行う者も選ばれる。<sup>(31)</sup> そして清書が終った後、上表文作製の最後の手続きとして上表文への国印の捺印が行われる。これもまた吉日が選ばれた上で行われている。<sup>(32)</sup>

以上のような手続きを経て上表文が完成するわけであるが、ここで注意しておく点は、上表文の起草は、作製当初将軍より指示されるが、以後起草者や清書者の人選、時日の設定など細かな実務はすべて蔭涼軒が中心となり行われている点である。

将軍や幕府は、選ばれた吉日に行われる承諾行為に参加するという、儀礼的な面での関与を中心とした。また上表文の文章は起草者が独自に考えて書いてはいるが、これとて執筆者の人選や披露・清書日の決定等と併せて、上表文作製全体の流れを把握しているのはあくまでも蔭涼軒であり、その内容も自ずから蔭涼軒の意向に沿ったものとなることは容易に推測される。

これまで見てきたように、使節の人選や上表文の作製など実務全般は、そのほとんどが蔭涼軒で、あるいは蔭涼軒を経由して処理されていることがわかる。この理由を二点述べておきたい。理由の第一は、『蔭涼軒日録』文明十八年七月二日条において、幕府自身が国書に記す将軍の名乗りをどうすれば良いか

という点について、蔭涼軒に問合せをしていることが象徴的にあらわしている。<sup>(34)</sup> 同じく文明十八年、將軍義尚は義満時代の天龍寺船派遣の際の事情を尋ねているが、この時の蔭涼軒の返答は「鹿苑御代事者年月太久、不可有記録歟」ということであつた。<sup>(35)</sup> しかし蔭涼軒以外に記録を有するものはなく、結局この問題は不明のまま捨置かれることとなっている。こうしたことから明らかなように、幕府は対外交渉の根幹にもかかわる重要案件や先例の記録など、外交関係書類をほとんど所蔵しておらず、対外交渉についての事情は蔭涼軒に記録が残されているか否かにかかっていた。こうした実務関連書類の保管は、蔭涼軒およびその周辺の人々の外交吏僚としての能力と相まって、蔭涼軒が実務を処理していく過程で最も強力な武器となりえたと思われる。先にも述べたように利権を目指す権力の多くは、蔭涼軒の実務処理の過程で人選や実務をめぐる様々な問い合わせ、要請を行っている。これに対し蔭涼軒は、これら複雑な問題を、時には対外交渉の先例を理由に、時には蔭涼軒自身の持つ幕府政治内部での権力を背景に処理にあたつた。蔭涼軒が行う外交実務は、蔭涼軒自体が幕府と密接な関係を有していた以上幕府側に有利な形で行われていたのは当然であるが、その段階において最も重要視されたのは、蔭涼軒に長年をかけて集積されていた先例であつた。

その意味では、蔭涼軒は公平な形で実務を実行しており、こうした態度は將軍に対しても同様であつた。延徳二年（一四九〇）四月義植が東福寺大徹光通を土官に推薦することがあつたが、蔭涼軒は「以西堂為土官事、不可有先例」として退けている。<sup>(36)</sup>

蔭涼軒が実務処理を行へた今一つの理由は、蔭涼軒自体の幕府政治での位置、つまりは幕府の官寺制度と大きく関わっている。使節団の人選にあたり、天与清啓の例にあつたように、正使に選ばれた（或いは候補者となつた）禪僧が在京しているとは限らない。彼らと連絡を取る、あるいは全国に散らばる禪僧の中から候補者を選択するだけの情報を有しているのは、幕府官寺制度の中心にある蔭涼軒および鹿苑院であつた。座公文や一夜住持の横行などその実態は多くの問題を抱えていたとはいえ、両者が官寺の住持任命に絶対的な権限を有していたことに疑いはない。<sup>(37)</sup> 公帖発給は蔭涼軒と鹿苑院が連絡をとりあいつつ行われるが、その過程で蔭涼軒は対外交渉における使節団の人選と同様の役割を果たしていた。公帖発給において蓄積された全国の西堂クラスの情報は、対外交渉の人選にも効果をもたらしたと思われる。



### 三、大内氏の交渉実務

これまで見てきたように、使節派遣は非常に複雑な実務が伴うものであるが、では大内氏はこれらの実務をどのように処理していたのであろうか。

大内氏の対外交渉において、当初その実務は領国内の禅宗僧侶によって担われていた可能性が高い。例えば『続善隣国宝記』所収の明応六年（二四九七）および永正十三年（一五一六）作製の上表文は、大内氏領国内の禅宗寺院の僧侶によって作製されているのが知られる。<sup>(38)</sup>

まず明応六年の二通の上表文は、その奥書から牧松和尚によって作製されたことが知られる。この牧松和尚は大内教弘の子息以参周省で山口保寿寺に住していた。一方永正十三年の上表文は、後に大内氏滅亡の地となった長門国金山長福寺の玄續西堂によって作製されている。保寿寺・長福寺いずれの寺院も領国の中でも大内氏と深い関わりを持つ禅寺であるばかりか、以参のごとく大内氏一族出身の僧侶によって作製されている事実は重要であろう。以参は相国寺・南禅寺の公帖を受け、中央とのつながりを持っていた。<sup>(39)</sup>

この以参および保寿寺については、伊藤幸司氏の指摘がある。<sup>(40)</sup>氏によれば「以参周省は大内氏の対外交渉を担う中心人

物」であり、彼が住した保寿寺は「大内氏の対外交渉を担う禅僧の拠点、育成機関としての役割」をもっていた。これをもつて大内氏の上表文全てがそうであるとはいえないものの、大内氏の実務組織を考える上において、以参および保寿寺の存在は、大内氏の対外交渉と禅僧の関わりの一つの形として想定できよう。<sup>(41)</sup>

しかしその一方で、これら「続国宝記」所収上表文の性格は考慮せねばならない。

現在我々が当該期の外交文書を知ろうとする場合、「善隣国宝記」「続国宝記」は最も重要な史料である。田中氏によれば「国宝記」の選述は、「先例旧規を集めてこれを後人の参考に供する」ことを目的としたもので、他方「続国宝記」は「以参庵ないし五山関係の僧が、外交文書の作成や管掌の参考とする史料を、得るに従って収録したもの」であった。<sup>(42)</sup> いわば職務上必要となる先例集であったが、こうした先例集の作成自体、それを必要とする立場の者の発想に他ならないわけで、田中氏が指摘するように、「国宝記」成立以降は国宝記が先例となっていく、後に外交文書を作成を命じられた亀泉集証が「異常と思えるほどの国宝記尊重と先例遵守の態度」<sup>(43)</sup>によって事に当たったという指摘が、両書の性格を端的にあらわしている。

しかしここで問題としたいのは、「国宝記」「続国宝記」に納

められる外交文書の特徴である。換言すれば、同書に所載される外交文書が当時の外交文書のどの程度であつて、またそれらがどのようにして収集されたのかということである。両書が当時の外交文書を網羅したものでないことはいうまでもない。

「国宝記」は瑞溪周鳳という一僧侶によつて作成された先例集であるし、「統国宝記」も「常時増補訂正」が加えられる性格の史料群であつた。ただそこに収められた外交文書は、瑞溪周鳳が鹿苑僧録を勤めていた、あるいは蔭涼軒という幕府における外交文書作成に深くかわかるセクション近辺にいたことにより収集しえたものである。

田中氏は外交文書起草者の系譜が文芸上の師弟関係を基礎としてゐることを指摘しておられる。<sup>(46)</sup>確かに上表文の起草という部分だけを取り上げて考えれば、上表文は起草者が独自に考えて書くものであり指摘の通りといえる。しかし上表文の起草は、先章で検討したように、起草者の選定から実際の執筆までその大部分が蔭涼軒によつて掌握されていた。加えて対外交渉は、交渉自体政治的性格の強いものである。一旦使節が組織される段になると、実務を取り仕切る蔭涼軒の許へ連日様々な使者が訪れているのはその証左であるし、こうした状況は細川氏と大内氏の対立が激化する中でより一層強まる傾向にあつた。交渉の実務はこうした政治状況の中進められるわけであるから、そ

の中で作成される上表文が政治色を帯びるのはいうまでもない。敵中周噩・瑞溪周鳳・横川景三・景徐周麟など上表文起草者のほとんどが鹿苑僧録経験者で占められている意味は再考されて良からう。したがつて編纂者の手元に集らない文書も存在したわけで、独自の交渉をすすめていた大内氏の上表文はそうした可能性の高いものといえ、その中でも選ばれて「統国宝記」に収められた意味こそが問題なのである。

こうした点に注意しながら、今一度「統国宝記」に収められる大内氏の上表文を見てみよう。大内氏の上表文の中で統国宝記に収められているものはわずか六通に過ぎず、年代も明応六年（一四九七）十月から永正十三年（一五一六）八月までの約二十年に限定されている。これ自体朝鮮への通交が五十回を超えた大内氏にすれば圧倒的に少ないといわざるをえないが、これは大内氏の外交政策と関係しているとは考えられまいか。

すなわち大内氏はこの時期義興が当主で、その義興は永正五年から十五年にかけて在京している。上表文の発給年代もほぼその期間に収まることから考えれば、「統国宝記」所収の大内氏上表文は、義興在京中にもたらされたものと推定できよう。さらにそれら上表文の内容をみると、六通の内三通は寺社への援助を求めたもの、二通が修好を求めたもの、残る一通が鷹匠の派遣要請であり、大内氏が一貫して興味を示し、幕府さえも

が一目措いた大蔵經の招来に関するものは収められていない。

一方『李朝実録』では、この時期これらの上表文を帶したと思われる使者の記録は確認できず、あるいは派遣そのものが行われていない可能性も考えられる<sup>(47)</sup>。こうしてみるとこれら公表された上表文は、大内氏にとつてみれば外交上差し障りのない程度の内容、もしくは幕府への提供を前提にした極めて表面的な内容のものということになる。詳細な事情はうかがうべくもないが、当該期における在京雜掌と蔭涼軒との関わりをみると、在京雜掌は様々な形で蔭涼軒に接触し、遣明船派遣における大内氏側の立場を有利なものとするべく活動していたことが知られる<sup>(48)</sup>。先にあげた上表文は、あるいはそうした大内氏の政治的活動の一環として提供された可能性は高い。その際彼らは独自の外交ノウハウの流出を恐れ、重要な内容のものを除外して提供したのではなからうか。

ところが、天文十六年（一五四七）大内氏の遣明正使として渡明する策彦周良が書き記した「渡唐方進貢諸色注文」<sup>(49)</sup>は、大内氏の上表文作製についてこれとは異なった経過を経た可能性を示唆している。

「渡唐方進貢諸色注文」は、周良が副使として参加した天文七年の渡明を中心に、上表文の他、明へ持参した様々な品物について、その寸法や員数、調達先などが詳細に記されている。

上表文については料紙の寸法や折り方、調達先などが逐一記されているが、その記載中に「御疏御認事」として上表文自体の作製の事情について記してあり、そこには「於京都天文七年御調之」とある。このことは天文六年八月十日発給と推定される大内氏奉行人連署書状中にも「御疏事は又可有隨身候」とあることから裏付けられ、天文年間の遣明使節の上表文が京都で作製されたことは確実である。しかしこの点について、これまでの研究では十分な理解はされていないように思われる。まず牧田氏は「この大内氏の遣明船も、国家的には足利將軍源義晴の命ずるところとして、その国書を京都の幕府で認めたのであって、その疏紙の寸法などについても、こまかしい規定があつたのである」と述べておられる。一方小葉田氏は「国書は將軍の名で署せられるのであるから、その閲覧を経なければならぬ」と述べられている。いずれの意見も、大内氏の催行する使節であろうとも、上表文は日明交渉に関する限り、従来通り幕府で作製されたものとの理解であろう。ところが諸色注文には、先の記述に続いて「天文十二、至高麗国香積寺渡海之時、大唐之御疏案文同右」との記述が見られる。この記述に従えば、天文七年の明への使節派遣だけでなく、天文十二年山口の香積寺が朝鮮へ渡海した際も上表文は京都で作成されていることとなる。いうまでもなく、大内氏が朝鮮へ使節を派遣するのは国家的な

外交でもなければ、上表文を將軍の閲覽に供する必要もない。ましてや前述したように、上表文は以参のごとき領国内の禪僧が起草することも可能であることを考えれば、わざわざ京都で作成されるには何か別の理由があると考えるのが当然ではなからうか。

ならばこの大内氏の上表文はどこで作成されたのであろうか。まず第一に考えられるのは、策彦自身が起草したというものである。しかし「御疏御認事」には「右御疏案文写之」との記載も見られ、策彦が上表文の案文を書き写したことがわかる。すなわち彼は上表文の案文に接しえたに過ぎないのである。下向の際も、既に作成された上表文を持参しただけなのであろう。

次に考えられるのは、入明の上表文であるから、従来と同じく実務そのものに長け、かつ外交実務のノウハウを蓄積した蔭涼軒周辺の人々、つまりは幕府による作製である。しかしこの問題についても、当時の大内氏と幕府・蔭涼軒の関係を考えると成り立ちがたい。

# 別幅

近年吾国、遣僧瑞佐西堂・宋素卿等、齋弘治勘合而進貢、又聞、西人宗設等窃持正徳勘合、号進貢船、蓋了庵悟西堂東帰時、弊邑多虞、干戈梗路、以故正徳勘合不達東都、吾即用弘治勘合、謹修職貢、示不怠也、如勅諭旨、宗設等為

偽、不言可知矣、大内多々良氏義興幕下臣神代源太郎為其元惡、故就誅戮、彼所虜而來大邦之人、前年既発船以之還中流遇風、船不克進、尚滞西鄙、近日当還焉、(以下略)<sup>(23)</sup>

右の史料は嘉靖六年(大永七/一五二七)八月の日付をもつ足利義晴の明国皇帝宛の上表文別幅である。この別幅を含めた上表文は、大永三年の寧波の乱後琉球を介して届けられたもので、ここで幕府は明側の態度に対してその姿勢を示している。

乱後初めての通信でもあり、ここに幕府の寧波の乱に対する考え方が如実に現れている。上表文において幕府は、瑞佐・宋素卿を遣わした細川氏方に立ち、乱の首謀者を「西人宗設」および大内義興家臣の「神代源太郎」ととらえ、彼らによる謀略が乱の遠因であると述べている。この上表文は月舟寿桂の起草であるが、幕府の上表文は先に見たように、蔭涼軒を中心とした外交組織が起草することとなっていたから、この上表文も同様の経過で起草されたものと思われる。さらに当時蔭涼軒側は、対明交渉における大内氏と細川氏の対立が激化する中で、大内氏に対し不信感をつのらせつつあり、そうした状況がこの大永七年の上表文に集約されたのであろう。

また、蔭涼軒を中心とした幕府の外交組織が持っていた大内氏の対外交渉に関する情報は極めて限られたものであることも関係しよう。前述したように、蔭涼軒が幕府外交において一定

の力を保持しえたのは、彼らの持つ情報であつた。しかし蔭涼軒といえども大内氏についての情報は極めて限られており、この情報の少なさが逆に大内氏にとって、幕府に対する有効な武器にもなっている。<sup>(34)</sup>

こうして見てみると、天文年間の上表文は京都で作成されたにしても、従来同様幕府の外交組織で起草されたとは理解がたい。これまでと同じく京都での作成であつても、実際の作製は全く異なつた外交組織によるものと考え必要がある。私はこの問題については、天文年間の使節だけでなく、永正の使節およびその後の大内氏の対明交渉独占が大きく関係していると考える。章を改め考えることとしよう。

#### 四、寧波の乱と実務組織

永正十三年（一五一六）、幕府は大内氏に対して対明交渉の独占を認める。しかし実際には大内氏による交渉の独占は直ちに果されたのではなく、細川氏との間で交渉の権利をめぐる両者の対立が激化する。こうした状況を反映してか、対明使節はこの後寧波の乱が起こる大永三年まで派遣されない。それ以前に派遣された使節は永正三年（一五〇六）であるから、結果として約二十年の隔たりがあることになる。

ところでこの永正の使節は、遣明使節をめぐる細川氏と大内氏との対立が最も激化した中での派遣であつたばかりか、先に見た大永七年の別幅に「蓋了庵悟西堂東帰時、弊邑多虞、干戈梗路、以故正徳勘合不達東都」と記されたように、帰国の際持ち帰るはずであつた正徳勘合が幕府へ届かないという重大な問題を残した。実はこの使節は、実務の面からみてもそれ以前の使節とは大きく異なつていた。

永正の使節が他の使節と異なつていた点として特筆できるのは、正使の人選についてである。従来正使の人選が蔭涼軒を中心に進められていたことは前述した通りである。この永正の使節についても当初は同様で、『鹿苑日録』明応八年（一四九九）七月二十八日条に「公府有命、可以泰甫和尚為遣唐正使、自当院而命焉<sup>(35)</sup>」とあり、正使の人選が従来通りの方法で行われ、泰甫恵通が正使に任命されたことがわかる。しかしその二ヶ月後、事態は大きく変化する。

北鹿苑寺来曰、勘合已入東福了庵和尚之手、問之則曰、前年大内當大唐進貢之物、中道而竜安寺与泉南之界（堺）人相謀以奪之、大内卿之、今以此物寄付于東福、故一号三号之両船勘合見付之、北鹿曰、前年進物命杉勘監（解）由以調焉、勘解由被官在界、又東福領徳治（地）庄主健都寺自周防而来、又東帰長老誘之、故納三百貫、以取此勘合者也、

北鹿曰、進貢物大内已調之、乗船者或中国之者、或界之杉之幕下者、是皆乗船、則帰朝之時、棹船以入大内境内者、如水就下也、為之奈何、況二号船則京兆之船也、豈無前憤哉、若留之則莫奈之何、請命東福製証狀、界之乗船者註名字、以校焉者明白、則苟帰船速到此乎、請以此告于勢州、則天下日本幸甚矣、予曰、令右京亮言之、予亦發其端也、これは『鹿苑日録』明応八年九月十九日条で、その内容は、前日の十八日に北鹿苑寺（泰甫恵通）が伝えた了庵桂悟唐勘合入手の続報である。ここで泰甫は、了庵が勘合を手にしたことに関し、入手の過程や状況などを伝えているが、そこには自分が正使に任命されたはずの使節が大きな問題を抱え、今後訪れるであろう大きな変化に動揺している様子がうかがえる。日記本文では直接の情報と伝聞による情報、それらに対する鹿苑院側の対応が入り交じって記されている。内容を整理するためにも、それぞれを分けてみていこう。

まず最初に泰甫が語ったところによれば、了庵の勘合符入手の事情は次のような内容であった。大内氏が準備をしていた明への貢納品が、竜安寺と堺の商人らによって盗まれた。大内氏はそれを恨み、最近になって貢納品を（取り返した上で？）東福寺に寄進した。ところが寄進物の中から勘合符が見つかり、これを了庵が手にしたというものである。

次にこの情報について、勘合入手過程における不審な点が記されている。あげられているのは二点で、一つは進貢物を（龍安寺と堺の者によって）奪われたとするが、進貢物は既に前年の段階で準備が終わっており、しかも事件当時杉氏被官が在堺していたこと。今一つは、東福寺領周防国得地保より庄主健都寺が上洛、東帰光松を仲介役に三百貫文を納めることにより勘合符の受渡しがなされた、というものである。

この二つの問題のうち前者の貢納品の強奪の問題はさておき、後者の寺領より関係者が上洛し勘合買得の斡旋を行ったという問題は重要である。

まず目につくのは、上洛の上勘合買得の斡旋を行ったとされる「庄主健都寺」なる代官僧についてである。その建都寺については詳細は不明なものの、明応五年発給と推定される『東福寺文書』の中「聖通書状案」に「下得地算用之事、建都寺申候」とあるのが確認されることから、同時期寺領支配の代官僧として現地得地で活動していたことが確認できる。彼ら代官僧は、東福寺寺内においては修造司や出官など所領関係の実務を担当した東班僧が数年間の任期で現地に下向していたもので、『東福寺文書』中では「給主」、「上使」などと記される場合もある。建都寺のように「庄主」として確認される代官僧の任務は、主には現地得地における年貢の徴収や運送の差配、守護大

内氏・守護代陶氏との年貢勘渡交渉であった。特に年貢百貫文前後の得地保において、明応末年頃には年額六十貫文を越える礼物・礼銭が大内氏関係者に渡されており、彼ら代官僧は大内氏・陶氏たちをはじめとした大内氏関係者との日常的な接触を通じた年貢勘渡交渉が主たる任務になりつつあったと思われる。こうした年貢勘渡交渉の場では、代官僧と大内氏・陶氏の間では年貢勘渡の問題だけではなく、様々な問題に話題が及んだことは想像にかたくない。<sup>60)</sup>

また、建都寺が勘合買得を持ちかけた先が東帰光松である点も、この勘合をめぐる一件において鍵を握っている。東帰光松は当時既に隠居の身であり、現地支配にあたる代官僧との接触は師弟でもない限り考えられない。そうした中寺領代官建都寺が東帰に接触したのは、彼が文明十五年（一四八二）の使節において居座として入明した人物であるという点ではなからうか。また東帰は、大内氏雑掌僧興文により疏黄使節に推挙されており、大内氏とも知己の間がらであったようである。<sup>61)</sup>さらに当時東福寺寺内には彼以外入明の経験者がいないことを考えれば、建都寺は入明の経験者である東帰と接触したことが分かる。そして建都寺と東帰との接触が通常の寺領支配の系列から逸脱した形で行われた点は特に重要であろう。

上記の点から考えれば、『鹿苑日録』において泰甫が了庵の

勘合入手に疑問を抱き、実際のところ勘合は買得されたものと考えたことは事実であったと思われる。大内氏と東福寺との間では、勘合符をめぐる極秘のやりとりが存在したのである。

結局永正度の遣明正使には了庵桂悟が任じられた。永正三年先にみた『鹿苑日録』の記事明応八年から七年ほどの期間を経た後のことである。この時の使節団は鹿苑日録の記載と同様三艘立で、その内大内氏は一号船と三号船を占めた。鹿苑日録の「一号三号之兩船勘合」との記述と符合するのを見ても、泰甫が案じた問題は現実のものとなった。これにより従来からの正使任命の方法は破棄され、買得によって得た勘合によって遣明正使が決まることとなったのである。

しかしながら従来の研究では、こうした一連の正使決定の流れ、あるいは了庵桂悟の遣明正使としての活動について必ずしも正しい理解をしているとはいえない。

了庵桂悟について、もっとも早くに論及したのは辻善之助氏であるが、氏は了庵の正使任命について、

明応八年に至つて、つひに遣明船三艘の中、一號と三號は大内氏に附與せられ、第二號は細川氏が之を得た。そして東福寺桂悟は、この遣明船三艘の正使に任命せられた。<sup>62)</sup>

と述べられるのみで、正使決定の具体的な事情にまでは論及していない。また、玉村竹二氏は『五山禅僧傳記集成』において

永正二年（一五〇五）、我が遣明使の内紛で寧波府で市外戦を行ない、遣明使の紀綱が大いに弛緩したので、その收拾のため、八十一歳の高齡を以て、その人格を買われて遣明正使に任ぜられ、翌三年五月生前に佛日禪師の勅号の特賜を受け、永正七年（一五一〇）、入明の途に上った。（以下略）

と述べられている。<sup>(63)</sup>

これらの了庵評は、辻氏の指摘が「八十七歳の遣明使僧了菴桂悟」という項目で、又玉村氏が「八十一歳の高齡を以て、その人格を買われて」と指摘されているように、いずれも了庵の渡明時点での年齢に重きが置かれ、頗る高齡で正使に任命され渡明した事実を、遣明使節全体の綱紀の引締めや明との交渉に長けた経験豊富な老僧としてとらえられていることは確實である。しかし先にもみたように、了庵が勘合を入手したのは明応八年であり、玉村氏が指摘をする永正二年の寧波での内戦以前のことである。もちろん勘合の入手が遣明正使任命にストレートにつながるものではないが、玉村氏が正使任命で重要視された了庵の高齡や寧波での内戦と同じか、それ以上の重要な意味をもっていることは確實であろう。

さらに勘合入手以前の了庵の行動をみると、明応年間の勘合買得に関係すると思われる点が見出せる。『蔭涼軒日録』・『庶

軒日録』などによれば、了庵はこれより先の文明十八年（一四八六）、寺領得地保のことに關して周防に下向している<sup>(64)</sup>。しかし先にも述べたように、当時の寺領支配は通常同寺東班衆によつて行われており、わざわざ了庵自身が周防へ下向し大内氏側と交渉する積極的な理由は見当たらない<sup>(65)</sup>。

ともあれこれら諸点から考えるならば、先述した勘合買得問題は、突発的に発生した事態というよりは、大内氏領国内の東福寺所領を媒介に、文明末頃から徐々に醸成されていたことは確實である。大永七年の上表文別幅が「蓋了庵悟西堂東帰時」とわざわざ了庵の名を出してまで批判した永正の使節は、あるいは蔭涼軒など従来の幕府外交の中心にいた人々の間では、大内氏と了庵桂悟、さらには東福寺との間で準備されたこととして周知の事実であつたのかもしれない。

さて次に、こうした大内氏と東福寺との関係が構築される理由を対外交渉の面から考えておきたい。

永正十三年、大内氏は幕府より対明交渉の独占を認められる。すなわち対明交渉は、大内氏が「代々存知」<sup>(66)</sup>することとなつたのである。その後寧波の乱を経て、大内氏による交渉独占はより確実なものとなるが、これにより大内氏は新たな事態に直面することとなつた。対明交渉を独占するということは、従来幕府が行ってきた事前の実務全てをも独占することを意味する。



使節団の人選にはじまり、上表文の作製、貢納品の調達など、前述したような事前の準備全てを自らが行わねばならない。いくらそれまでに朝鮮との活発な交流を行い、対外交渉についてある程度のノウハウをもっていた大内氏と雖も、朝鮮への使節派遣と明への使節派遣は大きく異なっていたと思われる。確かに大内氏は従来から対明交渉に参加してはいたものの、その実態は経営者いわば出資者の一人として、船舶の調達や船団の警固など幕府の命令によって行ったのであって、実際の実務全てを掌握し担当していたわけではない。また、そうした段階においても伊藤氏が指摘するごとく、大内氏は博多に進出し当時既に対外交渉に深く関わっていた聖福寺との関係を強めている。ましてや交渉権を独占することになれば、より確実に実務を担当する組織を準備する必要があることは自明であろう。

こうした点を裏づけるように、天文年間の使節は、天文七年の湖心碩鼎をはじめ聖福寺・東禅寺など博多の寺院から選ばれている。<sup>(68)</sup> 渡航以前の準備の内、貢納品の調達については、硫黄は薩摩の島津氏に対して、瑪瑙は本願寺にその調達が依頼されているが、島津氏に対する依頼は、従来幕府において「硫黄使節」として行われていたものであろう。また、先にみた「渡唐方進貢諸色注文」によれば、周防に到着した上表文への押印が義隆の前で行われたことが記されているが、これは従来將軍の

面前行われた上表文への国印押印儀礼を真似ていると思われる。<sup>(70)</sup> 大内氏は、交渉を独占することにより、従来から行われてきた実務や儀礼を、全て自らの力で行おうとしているのである。

一方東福寺について考えてみると、東福寺は対外交渉に対して興味を示していなかったわけではない。同寺新安沈船でも知られるように、鎌倉末期には博多の度弟院承天寺とつながり交渉を進めていたことを考えれば、むしろ強い意欲をもっていたといえよう。ただ日明交渉となると、先述したごとく、そのほとんどは蔭涼軒を中心とした人々によって占められ、了庵以前に東福寺関係者のうち日明交渉に関わった者として確認できるのは、わずかに東帰光松のみである。しかし彼とて居座として入明しただけで、決してその中枢に関わっていたとはいえない。東福寺は日明交渉においては、いわば「蚊帳の外」であったのである。このように考えると、明応末年の了庵桂悟勘合買得問題は非常に重要な意味を持つこととなる。東福寺にとって、明との交渉に大きな影響力を持つ大内氏の領国において、所領を持ち、かつ守護関係者との交渉があるという従来からの関係は、対外交渉の分野で大内氏に接近する絶好の機会であったといえよう。うがった見方をすれば、天文年間わずか百石程度の年貢勘渡のために西堂僧が下向した理由は、こうした辺りにあったのかもしれない。

## おわりに

これまで、室町期の対外交渉実務について、幕府・大内氏それぞれを例に検討してきた。小括すれば次のごとくである。

(一) 室町期の対外交渉実務は、外交吏僚としての能力に優れた禅僧達によって担われていた。幕府においては蔭涼軒を中心に、全ての実務が彼らを経由し行われていたが、その際は彼ら自らに集積した先例など交渉に関わる情報を強力な武器とし、利権獲得を目指す様々な権力の介入を退けていた。

(二) 大内氏においては領国内の一族出身者、従来から独自に交渉を進めてきた博多禅院などを組織し実務を担当させていた。

(三) しかしその一方で天文年間の大内氏上表文が京都で作製されるという事実は、従来領国内禅院僧侶たちによって担われていた大内氏の外交実務が、日明交渉独占という事態には十分対応できなかったことを推測させる。また同時期東福寺が明応末年の勘合買得を契機として大内氏に近づき、対外交渉への関与を深めたことが確認された。

以上のことをふまえて、あくまでも推測の域をでるものではないが、多少の見通しを述べておきたい。日明交渉の独占によ

り高度な実務集団を組織する必要に迫られていた大内氏と、従来の幕府外交においては十分に関与できなかった東福寺との間には、利害が一致する部分が多い。結局のところ、東福寺が大内氏の外交実務を担ったという確証は得られてはいないが、両者の関係が永正の使節のみにとどまらず、その後も継続したことは十分に予想できるのでなかろうか。

最後に、今後検討を必要とする問題点をあげ、まとめにかえたい。

今後の課題としてまず第一にあげられるのは、幕府・大内氏の交渉実務のありようを、細川氏と大内氏の対立関係により明確に位置づけることである。これまで我々は、幕府の外交実務は五山僧たちによって担われたと理解していた。それ自体誤りではないが、本稿でも検討したように、実際のところそうした実務を担う五山僧たちは蔭涼軒を中心とした一部の者たちでしかなく、五山各寺院の対外交渉への関わりかたは一樣ではない。今回は地域権力の外交実務を主題としたため、幕府外交については概略のみの検討にとどまった。しかし今後は、そうした五山各寺院やそこで活動する禅僧たちの外交への関わりを、対外交渉という各権力の思惑が複雑に絡みあう場において、大内・細川両氏の対立関係の中に位置づける必要があると考える。

第二には、東福寺と博多禅院との関係を明らかにすることが

必要であろう。この点については既に伊藤氏も指摘している点<sup>(1)</sup>ではあるが、今回は筆者の能力不足により全く言及できなかった。ただ、東福寺は天文年間得地保の年貢を博多で勘渡されている。この事実<sup>(2)</sup>は東福寺と博多禪院との関係が下地にあつて初めて可能となるものであり、そうした東福寺と博多禪院との関係は、単に年貢の勘渡にとどまらず、対外交渉を含んだその他の面にまで及んだことは想像に難くない。これらについては従来から十分に検討されてきたとはいいがたく、今後そうした点についても考察する必要がある。特にこの関係を実質的に形作っている京都と博多を往来する個々の禅僧達について、彼らがどのような活動をしているのか、門派の違いなどを考慮した上で詳細に検討する必要がある。

そして最後に、大内氏が領国内に多くの禅寺を開き、その開山や住持に京都の五山僧を招いたことは広く知られている。これらについては多くの場合、禅宗の地方興隆や地域権力の禅宗への傾倒といった文化史的・宗教史的な側面から語られ、下向した僧侶や大内氏の信仰等固有の問題として語られる傾向が強い。そのため地域権力やその領国統治、政策との関わりでは十分な言及は行われていない。しかし桜井景雄氏によつて紹介されたように、梅屋宗香が周防下向中「高麗国疏」を製していることを考えれば、彼ら下向僧は単に文化の伝導者として下向し

ただけではなく、大内氏の政策や外交にも深く関わっていたこともまた事実なのである。こうした点についての再検討は、従来の地域権力と禅宗・禅僧との関係像とは異った、新たな理解を示す手立てとなるのではなからうか。

## 註

- (1) 小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』(一九四一年、刀江書院)、牧田諦亮『策彦入明記の研究』(一九五九年、法蔵館)。
- (2) 青山公亮『日麗交渉史の研究』(一九五五年、明治大学文学部文学研究所)、中村栄孝『日鮮関係史の研究』(一九七〇年、吉川弘文館)、田中健夫『中世海外交渉史の研究』(一九五九年、東京大学出版会)、同『中世対外関係史』(一九七五年、東京大学出版会)、同『対外関係と文化交流』(一九八二年、思文閣出版)、長節子『中世日朝関係と対馬』(一九八七年、吉川弘文館)など。
- (3) 今村 鞆『足利氏と朝鮮の大蔵経板』(『朝鮮』一八六号、一九三〇年)、堀池春峰『中世・日鮮交渉と高麗版蔵経―大和・円成寺栄弘と増上寺高麗版―』(『史林』四三一六、一九六〇年)など。
- (4) 上田純一『書評「東アジア往還」』(『日本史研究』四〇七号、一九九六年)。
- (5) 村井章介『朝鮮に大蔵経を求請した偽使について』(『日本前近代の国家と対外関係』、一九八七年、吉川弘文館)。
- (6) 橋本雄『中世日朝関係における王城大臣使の偽使問題』(『史学雑誌』一〇六編二号、一九九七年)、米谷均『一六世紀日朝関係における偽使派遣の構造と実態』(『歴史学研究』六九七号、一九九七

年。

- (7) 田中氏前掲注2論文、西尾賢隆「京都五山の外交的機能外交官としての禪僧」(『アジアのなかの日本史』II 外交と戦争、一九九二年、東京大学出版会)。
- (8) 田中健夫「前近代の国際関係と外交文書」(一九九七年、吉川弘文館)、またこれに先立つ形で訳注日本史料『善隣国宝記・新訂続善隣国宝記』(一九九六年、集英社)がまとめられたことも大きい。
- (9) 田中氏前掲注2諸論文、および村井章介『東アジア往還』(一九九五年、朝日新聞社)
- (10) 『蔭涼軒日録』文明十九年八月二十五日条(増補『続史料大成』。以下『蔭涼軒日録』については『蔭涼』と略し年月日のみを記す。
- (11) 朝鮮との交渉の場合、通交希望者と幕府との連絡は担当奉行を介して行われていたようである。(『蔭涼』長禄二年四月二十六日条)。
- (12) 『蔭涼』長享二年二月二十三日条。
- (13) 『蔭涼』長享二年二月二十四日条。
- (14) 『蔭涼』長享二年三月十日条。
- (15) 『蔭涼』長享二年三月十一日条。
- (16) 大内氏の在京雑掌僧については、小林健彦「大内氏の対京都政策―在京雑掌(僧)を中心として―」(『学習院史学』二八号、一九九〇年)参照。
- (17) 『蔭涼』長禄四年六月十七日条。
- (18) 『蔭涼』長禄四年七月二十九日条。
- (19) 『蔭涼』寛正二年十一月二十六日条。
- (20) 『蔭涼』寛正五年四月三日条。
- (21) 『蔭涼』寛正四年九月十七日条、および『蔭涼』同五年二月十二日条。
- (22) 『蔭涼』文正元年二月十六日条。
- (23) 『蔭涼』文明十八年五月二十六日条。
- (24) 『蔭涼』長禄二年六月二十一日条。
- (25) 『蔭涼』寛正六年十二月六日条。
- この他、朝鮮への使節が持参する上表文に「御印」を捺す事例としては長禄二年の土岐氏の例(『蔭涼』長禄二年八月七日条)や、寛正三年の天龍寺の例(寛正三年二月二十九日条)が確認できる。また天龍寺の例からは、御印の管理も蔭涼軒の任務であったことが分かり、蔭涼軒は必要に応じて御印を御倉から出し入れしている。
- (26) 長節子「対馬宗氏領国支配の発展と朝鮮関係諸権益」(『朝鮮学報』三九・四〇号、一九六六年、後同氏「宗氏領国支配の発展と朝鮮関係諸権益」として『中世日朝関係と対馬』に収録)。
- (27) 『蔭涼』文正元年二月二十八日条。
- (28) 『蔭涼』文明十八年五月二十六日条。
- (29) 『蔭涼』寛正五年二月十三日条。
- (30) 『蔭涼』寛正五年六月二十日条。
- (31) 『蔭涼』延徳四年六月六日条。
- (32) 『蔭涼』寛正五年六月二十日条。
- (33) 『蔭涼』寛正六年六月十二日・十四日条。
- (34) 『蔭涼』同日条によれば「高麗疏清書事」の際、將軍の御名乗事が問題となっており、蔭涼軒は將軍より「鹿苑相公応永八年書云、准三后某云々」との問い合わせを受けている。
- (35) 『蔭涼』文明十八年十二月二十八日条。
- (36) 『蔭涼』延徳二年四月日条。
- (37) 今枝愛真「公文と官銭」(『中世禅宗史の研究』、一九七〇年、東京大学出版会)。
- (38) 田中氏前掲注8「続善隣国宝記」二二号文書。以下「続善隣国宝記」は「続国宝記」と略す。

- (39) 玉村竹二『五山禅僧伝記集成』(一九八三年、講談社)。
- (40) 伊藤幸司「大内氏の対外交流と筑前博多聖福寺」(『仏教史学研究』三九卷一号、一九八七年)。
- (41) 『蕉軒日録』文明十八年十月五日条には「寿侍者鉄牛求状于保寿寺、以入高麗也」との記載もみられ、大内氏の紹介をうけ入鮮する際にはやはり以参周省が関与している。
- (42) 田中「善隣国宝記の成立事情とその背景―室町外交における五山僧侶の立場―」(同氏「中世海外交渉史の研究」所収、のち前掲注8書に「善隣国宝記解説」として収録)。
- (43) 田中「『統善隣国宝記』解説―所収文書の検討と新訂本の作成―」(前掲注8書所収)。
- (44) 前掲注42論文参照。
- (45) 田中前掲注43論文。
- (46) 田中前掲注42論文。
- (47) 米谷前掲注6論文。
- (48) 小林前掲注16論文。
- (49) 牧田前掲注1書上巻二八二頁。
- (50) 牧田前掲注1書下巻二四頁。
- (51) 牧田前掲注1書下巻二五頁。
- (52) 小葉田前掲注1書一六一頁。
- (53) 『統国宝記』所収二五号文書。
- (54) 例えば『蔭涼』長享二年二月二十四日条には  
興文首座語愚云、大内方大蔵経十三蔵持之、就中七蔵者好経也、其内上々之経有一部、公方様若有御所望、被置東府、乃可令進上、若為置他所有御所望者、不可領掌申、先為置東府有御所望、經一兩年後、御寄進于相国可然、又有鐘、以南兩鑄付梵字唐鐘也、是亦有御所望者可進之、

中世後期における地域権力の対外交渉と寺院 ― 交渉実務を中心に ―

- とあり、興文首座が領国に保管される蔵経を引き合いに出し、自らの交渉の成果を誇示しているが、こうした駆け引きが可能なのは、幕府側が大内氏の交渉の実態をほとんど知らないことによる。
- (55) 史料纂集『鹿苑日録』明応八年七月二十八日条。以下同書よりの引用は『鹿苑』と略す。
- (56) 『鹿苑』明応八年九月十九日条
- (57) 年末詳「聖通書状案」(大日本古文書『東福寺文書』四六五号)。  
以下『東福寺文書』よりの引用は同様。  
同文書は年号を欠くが、①聖通書状中には大久なる代官僧が確認でき、この大久が明応年間頃現地支配にあたっていること。②大久は同書状中「卯年済物」を弁済しないと指摘されているが、得地の活動時期を考えればこの卯年は明応四年である可能性が高いこと。③書状中の「未無御返事候間、迷惑候、雖然御陳中之事候」との記述から、守護大内氏が出陣中のため不在であったことがわかるが、これは小規模な出陣を別にすれば、明応五年五月の大内義興の豊後出陣のことと思われること。以上三点から本文書の発給は明応五年と推定した。
- また聖通は、延徳四年(一四九二)五月、葉室光忠の斡旋により博多聖福寺公帖を望んだ智秀西堂・堅智西堂が、謝語の有無などを理由に蔭涼軒が難色を示していた際、目安を提出している(『蔭涼』延徳四年六月十七日条)。
- (58) 明応元年十二月二十二日付「東福寺領周防得地保年貢算用状」(『東福寺文書』四四八号)、および明応九年四月二日付「東福寺領周防得地保三作公文文年貢算用状案」(『東福寺文書』四五一号)など。
- (59) 明応元年十二月二十二日「東福寺領周防得地保年貢催促礼物算用状」(大日本古文書『東福寺文書』四四八号)。なお、東福寺の寺領

支配の詳細については、拙稿「室町戦国期における東福寺の所領支配とその変化―周防国得地保の場合―」（『鷹陵史学』一七号、一九九一年）を参照されたい。

(60) また注59史料では、そうした札銭の一部が保寿寺にも支払われているのが確認できる。大内氏と深い関わりがあった保寿寺に札銭を支払い、勘渡交渉をより円滑に進めることが目的ではあろうが、保寿寺が対外交渉の中心的な立場にいたことを考えれば無視できない。

(61) 『蔭涼』長享二年九月十三日条。

(62) 辻善之助「八十七歳の遣明使僧了菴桂悟」（同『増訂海外交通史話』、一九三〇年、内外書籍）三二六頁。

(63) 玉村前掲注39書「了庵桂悟」の項。

(64) 『蔭涼』文明十八年六月七日条、『蕉軒日録』文明十八年六月九日条。

(65) 了庵は下向後、周防においては「太守并諸寺展待傾心、毎座聯句」する状況であったという（『蕉軒日録』文明十八年八月二十五日条）。また下向途中には守護代陶氏の子息智侍者に蔭涼軒への照会状まで与えており（『蔭涼』同年七月二十一日条）、寺領のことに関する交渉というよりは、『蔭涼』同年六月七日条に「赴大内府君第」とあることから、大内氏に請われて下向した印象をうける。

(66) 永正十三年四月十九日付「室町幕府奉行人連署奉書案」（東京大学史料編纂所蔵「室町家御内書案」上）。

(67) 伊藤前掲注40論文。

(68) 牧田前掲注2書。

(69) 牧田前掲注2書。

(70) 「尊海渡海日記」（『広島県史』古代中世史料編二）。

(71) 伊藤前掲注40論文。

(72) 『東福寺文書』四六三号。

(73) 桜井景雄「梅屋宗香と乗福寺本『鷗庵遺稿』等について」（同『禪宗文化史の研究』一九八六年、思文閣出版）。

（一九九七年七月十日脱稿）